

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ジューディス』の本文批評のために
Author(s)	酒見, 紀成
Citation	ニダバ , 13 : 21 - 28
Issue Date	1984-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047151
Right	
Relation	



『ジューデイス』の本文批評のために

酒 見 紀 成

古期英語研究の最近の傾向の一つは従来の研究の再検討であろう。例えば、『ベーオウルフ』の dating の問題、variation の基本的性質に関する問題、語の意味解釈の問題等がそれであるが、吉野利弘氏(立教大助教授)も言われるように、「先ず必要な作業は、テキストに直接あたり、それに基づき、今までの研究の再検討をすること」であろう(『英語青年』1983年12月号, p. 35)。

本稿で *Judith* を取り上げたのは、この詩がベーオウルフ写本集(Cotton Vitellius A. XV)に収められており、『ベーオウルフ』の後半を書写した写字生がこの詩をも写したと言われているからである。本稿の第一の目的は『ジューデイス』の本文とその注釈を再検討することであるが、これが『ベーオウルフ』にまつわる種々の問題にも光を投げかけてくれるだろうと期待される。

利用した版本は Cook (1904), Wyatt (1919), Dobbie (1953), Sweet (1967) それに研究社版(1972)であるが、そのうち Wyatt のは ll. 15-121 と ll. 246-292 a だけを収め、研究社版も ll. 1-121 だけの抜粋である。問題の箇所を提示するには Cook に準拠した。数字は Line を示す。

※

1. この詩は現存する写本では途中から始まっており、抜け落ちた部分がどのくらいか、この詩の original length は何行だったのかが問題となる。写本の cantos は X, X1, X11 及び X の前の14行であるので、全体の約3分の1が残ったことになる。従って元の長さは約1320行である。Dobbie はこの詩の sources である経典外聖書の『ユディト書』と比較し、これが15章の終りまでで315 verses あり、そのうち古英語の『ジューデイス』に基づいているのは12章10節から15章の終りまでの95 verses であるので、単純に計算すれば、元の長さは約1200行となるという。従って1200行から1300行くらいだったのではないかという結論が出る。しかし、これも定説とは言えないようである。Bradley は1982年に出たその翻訳集の中で、“It is now generally thought doubtful that *Jud* was ever substantially longer than the surviving text, though certainly the opening is missing.” と言っているからである。

1. **gifena**. Cook はこの語を l. 1 b の最後に置いているが、Dobbie は Kaluza 及び Pope に従って l. 2 a の最初に置いている。そうするとこの半行には頭韻を踏む語が3つになり、他では見られないパターンを生じることになるが、この詩には他にも“metrical irregularities”があるのでかま

わないと言う。Sweet や研究社版も l. 2 a の最初に置いている。

2. **ðar**. 写本の通りであると思うが、Sweet と研究社版はこれを *ðær* に修正している。Cook と Dobbie は写本の形を保持する。なお Cook は “This form, according to Sievers, is Late West Saxon.” と注に書いている。

2. **gearwe**. Cook はこれを adv. ととるが、研究社版は形容詞 *gearo* の acc. sg. f. と解し、l. 3 の *mundbyrd* にかける。

4. **hyldo**. Cook, Körner, それに研究社版はこれを gen. sg. ととり *pearfe* にかけるが、Bright や Dobbie は acc. sg. と解し、*mundbyrd* と parallel と見て l. 3 b の後にコンマを打つ。

7. **Holofernus**. 母音が頭韻を踏むからと言って、Sweet や研究社版がしているように、*Olofernus* と normalize する必要はないようだと言っている Dobbie は言う。

9. この行は頭韻が a-verse に 1 つしかないので、Trautmann はこの半行を *girwan gilp-swæsendo* か *girwan gliwæsendo* に修正することを提案した。しかし Dobbie は “Judith, like the Battle of Maldon and other late poems, does not always conform strictly to the older alliterative practices” と言って修正しない。

10. **ræswan**. 多くの学者がこれを nom. pl. ととっているが、Dobbie や Bradley は *peodne* と並行する dat. sg. と解している。

11. **dogor**. 写本(以下 MS. と略す)には *dogore* (m. instr. sg.) とあるが、Cook と Kluge (2-4ed.) は Luick に従って韻律上の理由からこのように修正する。しかし修正しない版も多い(Sweet, Dobbie, 研究社版など)。

16. **weagesiðas**. この語は “companions in misery” (「苦難をわかつ友たち」とか companions in crime” (「共犯者ら」) を意味し得る (Bos.-Tol. の辞書には “A companion in misery or in wickedness” とある) が、この 2 つの意味には隔たりが感じられる。Cook や研究社版は前者をとり、Dobbie, Gordon, Bradley 等は後者をとる。Dobbie がそうとるのは、この語がラテン語 *satelles* (「手先」) の注解として使われているからであり、他に Wulfstan の説教集に 2 回使用されているが、いずれも “the companions of the devil in hell” を意味するからである。

19. **fulle**. Cook はその版本の Glossary でこの語を acc. pl. m. としているが、nom. pl. m. のミス。また研究社版は nom. pl. n. としているが、それが一致する名詞は *būnan* (f.) と *[o]rcas* (m.) であるから中性とするのは誤り。

25. **gylian**. Cook も Bos.-Tol. もこの語を弱変化動詞 *gylian* の過去形ととっているが、Dobbie はこのテキストの成立の遅さ — 学者によって多少ずれがあるが大体 10 世紀頃 — を考えると、意味の同じ強変化動詞 *giellan* (= *gellan*, *gyllan*) の “a unique analogical preterite” であろうと言い、研究社版もそのように解している。

26. **medugāi**. Cook の Glossary に nom. sg. f. とあるのは、Holofernes を指すので、m. の

ミスである。

27. **gebærdon.** *gebæran* の意味は Bos. -Tol. に “*To bear one’s self, behave or conduct one’s self*” とあるが、この文脈では、Holofernes が、たとい酒に酔っていたとはいえ、「饗宴に列した客人たちに立派に振舞えと諭した」となり、しっくりしない。Sweet は “*ply themselves well*” と解し、Timmer は Schücking の提案を受け入れ “*cry out in joy*” と訳している。Cook は “*vociferate*” としているので Timmer に近く、“*behave well*” と訳す研究社版と “*bear themselves bravely*” とする Gorden は Bos.-Tol. に従っており、「大いに飲め」と説明を加える羽染氏は Sweet の説を採っている。また Bradley は “*enjoy themselves well*” と訳している。ところで、“*cry out in joy*” (「歓声をあげる」という意味は、一見したところ、「振舞う」というこの動詞の原義から遠いようであるが、Holthausen, AEW のこの項には “*sich benehmen, jubeln*” とある。

32. **agotene.** *agēotan* がこのように属格と共に受動構文で用いられた例が他にないので、意味の特定が遅れたが、今では “*drain*” に落ち着いているようである。そのプロセスは “*to pour out, shed*” → “*destroy*” → “*deprive*”(G. Shipley) → “*drain*”(Sweet, Cook)。

32. **[b]aldor.** MS. では *b* が拭き消されている。本文にはどちらの形も現われるので、ここではどちらを詩人が意図したのか知ることは困難である。Dobbie と Wyatt は *aldor* を、Sweet, Körner, Cook それに研究社版は *baldor* を採用している。ちなみに、共に “*lord, prince*” の意であるが、*aldor* は “*elder*” から、*baldor* は “*bolder*” から来ている。

33. **fyl[ī]an.** MS. *fylgan*. Cook がこのように修正したのは、写本の形は “*to serve*” を意味することが期待されるが、詩では他に用例がないと考えたからである。しかし Sweet, Bos. -Tol., Grein-Köhler, Dobbie, 研究社版は写本の形を保持する。

39. **bearhtme.** Sweet, Cook, Bradley 等はこれを *bearhtm* (“*twinkling (of the eye)*”) と結びつけ、“*instantly*” と訳すが、Dobbie, 研究社版それに羽染氏は *bearhtm, brahtm* (“*noise, tumult*”) の instr. sg. と解し、「騒がしく」と訳す。

40. **iūdithe.** MS. *iudithōe*. Dobbie と Wyatt は写本の形を保持しているが、Sweet, Cook, それに研究社版はこのように修正する。

47. MS. *and ymbe*. *and* は “*evidently superfluous*”(Cook) であるので、どの版本も omit する (Dobbie によれば、Kluge(1,2ed.) と Wülker は保持している)。

54. **on reste.** Cook と研究社版は *reste* を acc. としているが、Dobbie は、それが修飾する *gebrōhton* は “*perfective*” の動詞であり、ここでは *on + dat.* を伴う “*a veab of rest*” と解されるので、多分 *dat.* であろうと言う。1.57にも類似の構文があるが(もともと、1.54では *active*, 1.57では *passive*)、ここでは Cook も *dat.* ととる。

55. **ste[rceð]farhōe.** MS. *ste::: | ferhōe*. 1698年の Thwaites の読みが一般に採用されているが、その場合 *st* が *sn*-と頭韻を踏むことになるので、幾つかの修正案が出されている。Ettmüller は

snelferhōe (“strong-hearted”) に、Grein は *swercendferhōe* (「酪酊した」) に、Rieger は *swercendferhōe* に、Sweet は 1.269 に現われる *sweorcendferhōe* (「ふさぎ込んだ」) に夫々修正する。このうち Sweet の読みは、その時 Holofernus の家来たちが「ふさぎ込んで」いたことになり、不適當であるとして、第15版では *stercedferhōe* に戻されている。要は、*st-* と *sn-* の頭韻を認めるか否かである。この形容詞は 1.227 にも現われるが、そこでは規則的に *st-* と頭韻を踏んでいる。

62. この行には 3 語しか存在しないので、色々な提案がなされている。(1) *galferhō* の後に *gangan* を補う (Cook, Sweet (9,10ed.), 研究社版)。Köppel は *gongan* とする。(2) *galferhō* の後に *guðfreca* (“warrior”) を補う (Garnett)。(3) *galferhō* の後に 1.62 a と同じように *and grædig* を補う (Foster)。— Cook はここで Holofernes を “greedy” と叙述する必要はないと言うが…。(4) *galferhō* の後に *cyning* を補う (Grein と Körner)。— Cook は *cyning* を入れてもむだであると言う。(5) この 3 語を拡充韻の半行とみて、残りの半行は写字生によって省かれたと解する (Schmitz と Dobbie)。(6) 写本の通りとし、*galferhō* だけで半行を構成するととる (Wyatt)。

57. **mōde.** Cook の Glossary に masculine とあるのは neuter の誤り。

65. **swylcne … æfter.** *æfter* を Cook と研究社版は adv. としているが、これは前置詞であろう。Sweet と Wyatt はこの前置詞が普通 dat. を支配するので、*swylcum* を補って読む。しかし Bos. -Tol., *Supplement* はこの箇所を、この前置詞が acc. を支配するまれな例として挙げている。Dobbie も同意見で、*swylcum* を補って読むことに反対し、この前置詞が acc. を支配していると見られる例を他の作品から 2 例挙げている。うち 1 例 — *ðā hæ be leohte gesihð, luteð æfter, Solomon and Saturn* 404 — は Bos. -Tol. も acc. 支配の例としているが、*ðā* は *æfter* に支配される以前に *gesihð* の目的語となっていると見るべきではなかろうか。

81. **Nergend.** Cook はこれを nom. としているが、acc. のミス。

82. **word.** Cook の Glossary に masculine とあるのは neuter のミス。

83-86 a. **frymða God … frōfre Gæst, Bearn Alwaldan, … ðrynesse ðrym.** 研究社版は *God*=*Gæst*=*Bearn*=*ðrym* とし、後の 3 つはいずれも *God* の variation、従って全部 vocative と解しており、Gordon や Bradley もそのように訳しているが、Sweet と Wyatt が *ðrynesse ðrym* というように *ðrym* だけを小文字にし、それ以外は大文字にしているところから、*ðrym* はむしろ *miltse þinne* の variation と解することもできよう。鈴木重威・もと子共訳ではそのように訳されている(「今乞いまつる 君が御恵み 三位一体の栄光を。」。Cook は *God* と *Gæst* と *ðrym* を夫々 nom. (呼格としての) としているので、*God* の variation と見ているのであろうが、*Bearn* だけ acc. と書くのはおかしい。nom. のミスであろう。

85. **pearfendre.** MS. *pearf fendre*. 単語の途中で行が変わったので、写字生がうっかり *f* を繰り返してしまったのであろう。

86-87. MS. では 1.86 b と 1.87 a に *ys* が 2 度現われるが、後の *ys* は写字生が誤って繰り返した

ものであろうと言われている。

89. **pȳs.** Cook の Glossary に instr. sg. m. とあるのは instr. sg. n. のミス。

90 a. 拡充韻は double alliteration を持つのが普通であるが、ここはそうっていない。Vetter は 1.89 の最後に位置する *mōte* と 1.90 の最初の *gehearwan* とを入れ換える。Schmitz も同意見。

90. **geunne.** Cook はこれを imp. sg. ととるが、研究社版は sbj. sg. としている。形態は同じなのだが、意味的に命令法と解すべきであろう。接続法では意味が弱くなるからである。

94. **hāte.** Sweet, Cook, Wyatt, Bos.-Tol. など多くの学者がこれを 1.93 b の *torne* と同様 adv. ととり、非人称的構文としているが、Dobbie は、*torne* が元来 *torn*, n. の instr. sg. であるので、*hāte* を *torne* にかかる形容詞と解する。

94. **hreāre.** この語の gender を Cook は “m.(?)” とし、研究社版は n. と書いているが、Bos.-Tol. が “m.(?)” としている他はどの辞書も m. としている。

97. **hyht.** Cook は f. とし、研究社版は m. とするが、Bos.-Tol. には “m. [f. Ps. Th. 77, 53.]” とある。

98. **genam.** 研究社版が「主語に ‘he’ を補う。」と書いているのは ‘she’ の誤植。

102 a - 103 a. **swā hēo ðæs unlædan eāðost mihte, / wel gewealdan.** Cook はこのように *mihte* の後にコンマを打っているが、他の版本にはない。Cook は、*eāðost* と *wel* とが parallel と見て *mihte* の後にコンマを置いた Rieger と Sweet (1-8ed.) に従ったのであろうが、Bos.-Tol. はこの箇所を “so she most easily might have complete power over the wretch” と訳しており、Dobbie もこれに賛成する。つまり、この 2 つの副詞はイコールではなくプラスの関係にあるのである。また、*swā* の解釈も「様態」ととるか「目的」ととるかで分れているようである。Bos.-Tol. 並びに “so as she could most easily manage the wretch efficiently” と訳す Bradley は後者で、「いと易くさばき得しごとく」と訳す鈴木氏と「もっともたやすく扱える仕方」と訳す羽染氏は前者である。「様態」ととれば *mihte* は直説法過去、「目的」ととれば接続法過去ということになるだろうか。

109. **[ōþ]re.** Cook の Glossary では acc. sg. f. となっているが、instr. sg. m. のミス。

125-127. **gebrohhte … on ðam fætelse.** Gordon はここを “the wise maiden swiftly brought the warrior’s head all bloody in the bag” と訳しているが、Dobbie はその注に “put … into the bag” という Klaeber の訳を挙げている。Bradley の訳も同様。これは前つづり *ge-* の perfective の意味に注目するからである。

127. **foregenga.** これは MS. の通りで、多くの版本がこれを採用しているが、Bos.-Tol. は、この語が男性名詞で、普通 “predecessor” を意味するのにここでは “maidservant” の意味が期待されるので、*foregenge* (f. “A fore-goer, female servant”) に修正する。しかし、C. Hall はその辞書の *foregenga* (m.) の項に “attendant” の意味をも与え、例としてこの箇所を指示している。K. Brunner の文法書によれば、*gemæcca* (「配偶者」)、*gebedda* (「同衾者」)、*geresta* (「やもめ」) のような男

性名詞の屈折をする語は通性的に用いられる。従って修正は不要。

134. **hie**. MS. hie hie. 1698年の Thwaites の版本も MS. と同じ。しかし、Thorpe (1834)が2番目の *hie* を省いて以来、後の校訂者はほとんどこれに従っている。

135. **eadhreðge**. MS. eadhreðige. Cook だけがこのように修正している。同様に彼は 1.160の MS. halige を *halge* に、1.203の MS. haligan を *halgan* に、1.178の MS. hæðenes を *hæðnes* に、1.195の MS. eowere を *zowre* に修正する。

138. **bēahhrodene**. Cook の版本に nom. pl. m. とあるのは nom. pl. f. のミス。

139. **fēðelāste**. Cook はこれを acc. pl. ととるが、Dobbie は *Beowulf*, l. 1632の *fēðelastum* と比較し、dat. (instr.) sg. であろうと言う。研究社版『ベオウルフ』の注には「この dat. は ‘along’ の意」とある。

144. **ludith**. MS. Iudithe. Rieger と Kluge (1ed.)を除いて、後の校訂者は皆このように修正する。Dobbie は、写字生の頭の中に直前の語の dat. が残っていたためであろうと言う。

146. Grein と Körner は 1.146 b からではなく 1.146 a から新しい文を始める (Dobbie)。

149. **hyre tōgēanes gān of ðære ginnan byrig**. 頭韻を踏む3つの音節のうち2つは a-verse に来るべきであるという理由から、Rieger と Sweet と Cook はこのように2つの半行を入れ換えるが、Dobbie は b-verse に double alliteration の来る例が 1.279 にも見出されるとして、写本の通りとし、Sweet (15ed.) も再びこのように訂正している。

150. **forlæt[aj]n**. MS. forleton. 写本の形の *-on* は *-en* を訂正したもの。Thwaites は *forlæten* と読んでいる。Sweet と Cook は、ここでは不定詞が期待されるとしてこのように修正するが、Dobbie は *forlæton* を保持している。LWS では不定詞の語尾 *-an* が *-on* として現われることもあるからであろうか。

153. **poncwyrðe**. この語の意味は Sweet や Cook が Glossary で与えている “memorable” ではなく、“deserving of thanks” であると Dobbie は言う。

158. **pāra læðða**. この属格句が修飾する名詞が存在しないので、幾つかの提案がなされている。(1) Rieger は本文には *læðða* の後に *gap* があることを指摘し、*to bote* (「償いとして」)かそれに類する句が失われたのであると言い、Zupitza と Schipper は *to teane* を補う。(2) Cook は、この箇所は韻律的に問題はないので、*bot* か *tean* のような意味が含意されていると考えればいいと言い、Monroe も *pāra læðða* は含意される名詞にかかると考える。(3) Imelmann は写本の読みを弁護し、“für die leiden” と訳す。これはこの属格を adverbial genitive と解するもので、Sweet と同意見。

163. **wf**. Cook の Glossary に sg. とあるのは pl. のミス。

182. **and þæt swýðor gýt**. MS. の通りであるが、Thwaites が *þæt* を省いていたので、初期の校訂者たちもこれに従っていた。しかし、Sweet や Körner 以後の校訂者はすべて他動詞 *ycan* の目的語となるべき *þæt* を持つ写本の読みに従っている (Dobbie)。

189-191. **Syððan** … **læoman**. 1.190の *sende* を Cook は pret. 3d sing. (or opt. pres. 3d sing.) としているが、Dobbie は未来完了の意味で用いられた接続法現在であろうと言う。さらに、この箇所はラテン語の *cum exierit sol*, *Judith* xiv. 2. を訳したもので、“As soon as God shall have sent the bright light (i. e., the sun) from the east,” の意味であると言う。

190. **arfæst**. MS. でもこのように書かれているが、初期の校訂者たちは *ærfæst* に修正していた。しかし Sweet, Cook, Dobbie たちは皆 MS. の形に戻している。

194. **fyllan**. MS. も同様。しかし Ettmüller は 1.191の *berað* (命令法)にに合わせて、ここも *fyllað* に修正することを提案した。Sweet, Cook それに Dobbie は写本の通りとする。Cook は、この不定詞は *to fyllanne* の意味で用いられていると言う。

201. **[sig]eþufas**. MS. *þufas*. 写本には gap はないけれども、頭韻を踏ませるために Ettmüller がこのように修正し、以後の校訂者は、Rieger, Kluge(1ed)そして Wülker を除いて皆これに従っている。ただ Holthausen は 1.201 b を *segnas bæron* と修正している (Dobbie)。

207. **w[i]stan**. MS. *westan*. 多くの学者が写本の通りとするが、Cook はこのように修正し (Dobbie もこれに従う)、Sweet は *wiston* に、Ettmüller は *weston* に修正する。Körner は、*westan* は *wiston* の別形であるとして写本の形を保持する。

210. **urigfeðera**; Cook はこのように 1.210の終わりにセミコロンを打つが、Sweet と Dobbie はコンマを置いている。

223. **st[edehea]rde**. MS. *st……rde*. このように復元されているが、この形容詞は、Dobbie によれば、他に記録がなく、*stede* (“place”) はこの結合では意味をなさない。Jiriczek は *stede* を古代アイスランド語の *steði* (“anvil”) と関係づけ、*strælas stedehearde* を「鉄敷の上で鍛えられた矢(鏃)」と訳した。*steði* と対応する OE の単語は **stedd* であるべきであるが、そのような語が存在したとは考えられないと Dobbie は言う。そこで Jiriczek は *steði* が古英語期に *steðe* という形で借用され、これが “graphic or phonetic substitution” によって *stede* となったのだと主張する。

228. **wrehton**. この語は 1.243にも出て来るが、Cook も Dobbie も 1.228の *wrehton* の意味は “awoke” で、1.243のそれは “aroused” であると言うが、1.247には *slegefæge hæleð slæpe tobred[an]* (「死すべき運命の武士たちは眠気をふり払った」)とあるから、1.243も “awoke” で良さそうである。というより、“awake” は自然に “arouse” をも含意するのであろう。また、Grein はこの語を 1.237に出て来る *æhton* (「追跡した」)に修正することを提案したが、Cook は “the change is rather violent” とする。Leo は 1.228 と 1.243のいずれの *wrehton* も *weahthon* (*weccan* の pret. pl.) に修正する。

231. **gecoste**. Cook の Glossary に nom. とあるのは、1.230の *swyrd* (n. acc. pl.) にかかるので、acc. とすべきである。

234. **ric[n]e**. MS. *rice*. Thwaites, Thorpe, Ettmüller 等の初期の校訂者たちは写本の形を保持

しているが、Grein がこのように修正してからは大体これが採用されている。

238. **grame.** Cook はこの語に “fierce, raging” の意味を与え、Gordon も “angered” と訳しているが、文脈から見て、Bradley や Bos.- Tol. と共に “adversaries, enemies” と解すべきであろう。Rieger は *gramra* に修正する。

243. **wrehton.** l. 228 の注を参照。Grein はこの語を *wehton* (*weccan* の pret. pl.) に修正する。

245. **morgencollan.** 第二要素の *-colla* は他に用例がないために意味が定かでない。A. Pogatscher はこれを *cwelan* (“die”), *cwalu* (“A quelling with weapons”) および Mod. E. *kill* の語源と思われる **cyllan* と関係づける。そうすると、この複合語の意味は “morning slaughter” となるだろう (Dobbie)。

247. **tōbrēd[a]n.** MS. *tobredon*. Sweet と Cook はこのように修正し、Dobbie は写本の形を保持する。l. 150 の注を参照。

249. **weras [wērig]ferhōe.** MS. *weras ferhōe*. MS. のように *ferhōe* だけでは意味をなさないもので、Cook は Körner に従ってこのように修正した。Ettmüller は *weras wideferhōe* と修正し、さらに l. 249 b の *hwearfum* を、頭韻を合わせるために、*wornum* に変えようとする。Sweet (の古い版) と Wyatt は、Rieger の提案に従って *weras hrēowigferhōe* (“the men sad at heart”) に修正し、Grein は写本の *weras* は *wērig* の誤写であると考え、*weras* を除く。これら 4 つの提案のうち Dobbie は最後のものが最も probable であると言い、Sweet (15ed) もこれを採用している。それから、l. 249 b の *hwearfum* と *w* との頭韻は例があるので (l. 314 の *r:hr:r*)、修正の必要はない (Cook)。

250. **Holo]fernus; hogedon āninga.** Dobbie は、この行には *h* で始まる語が 2 つ存在するが、*Holofernus* はこの詩の他の箇所でも母音と頭韻を踏んでいるので、ここでも同様であろうと言う。また Luick はこの行の b-verse を *hogedon* に強勢を置かないで C-type と解する。

(あと100行分を残して紙幅が尽きてしまった。残りは別の機会に譲りたい。)